2003年アメリカ文芸の定点観測

―― プルー，ベイカー，『パーティザン・レヴュー』終刊と S・ソンタグ，ル＝グウィン，J・ディディオン，トバイアス・ウルフ ――

米　塚　真　治

本稿は雑誌『英語青年』（研究社）「海外新潮」欄に2003年5月号から2004年3月号まで一年にわたり連載した文芸時評の決定稿である。

雑誌掲載時には原稿用紙二枚半という字数制限があったため，必要に応じて内容の割愛・パラフレーズを行った。オリジナル原稿に一部修正を施した本稿が，決定稿である。

各章末には執筆年月を付した。また論文末尾に，執筆時以降2005年12月現在までに起こった，各章に関連する事項をまとめた。

検索の便のため冒頭に，MLA International Bibliography 収録の各初出原稿のインデックスを掲げる。

Yonezuka, Shinji. "Oo, kaitakusha yo!." *Eigo Seinen/Rising Generation,* 149: 2 (2003 May), p. 98.
Subject Terms: American literature; 1900–1999; Ozeki, Ruth L.: *My Year of Meats* (1998); novel; and Proulx, Annie (1935–); *That Old Ace in the Hole* (2002); treatment of meatpacking industry.
ISSN: 0287–2706
MLA Update: 200301
MLA Sequence: 2003–1–16766
MLA Record Number: 2003420221

Yonezuka, Shinji. "Nani o mitemo nanika o omoidasu." *Eigo Seinen/Rising Generation,* 149: 4 (2003 July), p. 236.
Subject Terms: American literature; 1900–1999; Baker, Nicholson (1957–): *A Box of Matches* (2003); novel; characterization; relationship to American identity; terrorism.
ISSN: 0287–2706
MLA Update: 200301
MLA Sequence: 2003–1–13833
MLA Record Number: 2003422170

Yonezuka, Shinji. "Yukaina guzen." *Eigo Seinen/Rising Generation,* 149: 6 (2003 Sept), p. 364.

Subject Terms: American literature; 1900–1999; Sontag, Susan (1933–2004): *Regarding the Pain of Others* (2003); *On Photography* (1976); prose; treatment of photography; relationship to left-wing politics; *Partisan Review.*
ISSN: 0287–2706
MLA Update: 200301
MLA Sequence: 2003–1–17305
MLA Record Number: 2003422220

Yonezuka, Shinji. "Kanashiki nettai." *Eigo Seinen/Rising Generation,* 149: 8 (2003 Nov), p. 492.
Subject Terms: American literature; 1900–1999; Le Guin, Ursula K. (1929–); short story; treatment of tourism; relationship to globalization.
ISSN: 0287–2706
MLA Update: 200301
MLA Sequence: 2003–1–15818
MLA Record Number: 2003422265

Yonezuka, Shinji. "Chishikijin to kyoshu." *Eigo Seinen/Rising Generation,* 149: 10 (2004 Jan), p. 620.
Subject Terms: American literature; 1900–1999; Didion, Joan (1934–); novel; treatment of California; relationship to the self.
ISSN: 0287–2706
MLA Update: 200401
MLA Sequence: 2004–1–14076
MLA Record Number: 2004420129

Yonezuka, Shinji. "Uso mo hoben." *Eigo Seinen/Rising Generation,* 149: 12 (2004 Mar), p. 747.
Subject Terms: American literature; 1900–1999; Wolff, Tobias (1945–): *Old School* (2003); novel; treatment of falsehood; relationship to relativism.
ISSN: 0287–2706
MLA Update: 200401
MLA Sequence: 2004–1–17579
MLA Record Number: 2004420258

おお，開拓者よ！[1]

2003 年 2 月 24 日付朝刊各紙に，「『構造改革特区』に省庁が抵抗」なる記事が載っていた。実は現在，日本の法律では，株式会社が農地を取得するには厳しい規制がかかっている。後継者不足のため農業の将来が危ぶまれるなか，政府としては，新たに株式会社の参入を認めてでも農業従事者を確保し，かつ農業「改革」と活性化の呼び水としたい。だが農民・農協側は，企業に農地を買われたら転売されたあげく産業廃棄物の処分場にされるのがオチ，と警戒を解いておらず，農水省は板挟みになっている由。

小泉「改革」のモデル，アメリカ合衆国では，農地取得に基本的制限はない。アメリカは日本よりひと足早く1980年代に，深刻な農業危機に見舞われたが，それを解決したのが「企業経営による農業」だった。くわしく言えば経営の大規模化，そしてプラザ合意とウルグアイ・ラウンドにもとづく輸出競争力の強化（すなわち「グローバル化」）である。近年の「改革」では，日本政府もこの「実績」をあてにしているわけだ[2]。

もっとも，「グローバル」になれば出るだけでなく「入る」のも増えるのが道理である。大規模化でいったんは成功した北米の農業も，近年では中南米からの低価格攻勢に苦しんでおり，今後はアジアをターゲットに肉など高付加価値品の輸出へシフトするのが急務であるという。そういえば日系アメリカ人作家Ruth L. Ozekiのベストセラー小説*My Year of Meats*（1998）[3]で，主人公が牛肉の消費拡大キャンペーンのため日本を訪れていたのも思い起こされる。

Pulitzer賞作家**Annie Proulx**が2002年12月に世に問うた新作*That Old Ace in the Hole*（2002）は，まさにそのグローバル市場とアメリカ国内農業と地域経済，そして地域の人々の生き様との関わりのすべてを扱って，もって他山の石とすべき作品である。

シカゴと東京とに本社を置くGlobal Pork Rind（「国際豚皮スナック」[4]）社の用地取得人Bob Dollarは養豚場用地買収の任務を帯び，アメリカ南西部，TexasとOklahoma両州にまたがるpanhandle地域に潜入する。ケージに豚がぎゅう詰めされた「養豚プラント」は地元に何の雇用も生まないどころか，すさまじい悪臭，アンモニアによる大気汚染と廃水による地下水汚染で，多くの州から嫌われ，閉め出されている。あげく養豚会社が目をつけたのが，この地域。かつて1920–30年代の大恐慌時代にはDust Bowl（砂塵災害）[5]に見舞われ，今また地下水源の涸渇と，過疎と，高齢化に悩むpanhandle地域である —— と聞けばどこかで見た構図で，われわれも身につまされずにいられまい。つまり，ここにはわが日本の「産廃問題」と同様の構図がある。

ストーリーはこう進んでゆく。豚は生き物ではない，“pork units”（豚肉生産装置）なのだと呼ばわり，ことあるごとに「多数者の利益」を掲げて地元住民と対立するGlobal社。しかし地元で灌漑用風車の管理を請け負う老人Ace Crouchをはじめ住民たちは，「ここに居場所を持つ者」の権利を主張し，団結して養豚施設を立ち退かせる。さらには地域の牧場内の仕切り柵を取り払い，牛のかわりにバイソン[6]の放牧を始める。

運動のリーダーの一人である修道士は説明する。「牛たちは自力では餌を探しに行けないので，今いる場所の草をすべて食い尽くしてしまう」，だから牧場内に仕切り柵を立てて人工的に牧区を区切り，定期的に移動させていく必要がある。他方，「自力で飲み水を探し，自分で移動できるバイソンは，土地と『関係』を持つゆえ，柵がなくても草を根まで食べ尽くしたりはしない」のだと。「牛」的なライフスタイルを延長した果てに来るのがプラントによる「養豚」だとすれば，バイソンのライフスタイル（それは地元民の生き方の表象でもあろう）はいかにもエコロジー的であって，顕著な対照をなしている。

興味深いのは主人公Bob Dollarの生き方である。「ドル（お金）」という名前を持つこの用地取得人は，しかし，単なる金目当ての悪役ではない。はじめ外来者であったこの若者は，情報を求めて地元住民と接触を続けるうちに，彼らとしだいに抜き差しならない関係を結んでゆく。用地取得の働きかけは依然として継続するのだが，その動機は「会社のため」から「住民のため」へと実質上変化してゆく。つまり，養豚場を立ち退かせて元の姿に回復できる見込みがない以上，隣接する敷地を買収して一人でも多く住民を「救出」することこそが自分の使命だと，Bobは発想するのだ。

Ace たちの養豚場追放計画が Bob の予想を裏切って実際に動き出すに及び，Bob も養豚会社を辞して計画に参加する。そしてミイラ取りがミイラよろしく，この土地への「Ｉターン」を決めるのである。

あくまで土地にしがみつこうとする地元民たちも，数代前に遡れば Bob と同じく，移住者の子孫である。移住当時は先住インディアンとの摩擦があり，開けた土地を求める牧畜業者と土地を柵で囲おうとする耕作者たちとの争いもあった。健全なるアメリカ精神の代表として語られる「開拓者精神」「フロンティア精神」も，元はといえば「移動」と「定住」とのせめぎ合いの中から生まれてきたものなのだ。矛盾の中から生まれるダイナミズムとしての「開拓者精神」── その現代における意義を語って，傾聴に値する作品といえる。

また，翻って現代日本の状況を考えるとき ── つまり，工業生産のグローバルな移転が進み，余ってしまった労働人口は，再び農業人口として吸収しなければならないだろうという長期的な見通しを考えるときにも，この作品における「Ｉターン」のありようは大いに他山の石とすべきものと思う。

ただ一点，作中で悪役とされている養豚会社が，日本人を社主に戴く日系企業となっているのは，逆ではないかと ── つまり，北米の巨大農業企業体こそが，日本に売り込みをかけている側ではないのかと思うけれども[7]。

（2003 年 2 月）

何を見ても何かを思いだす[8]

イラクで米軍が快進撃を続け，サダム・フセインがいずことも知れず姿をくらましたこの数ヶ月間。

TV でアニメ番組を見ていてさえ，敵は「覚えてろよ」と捨てぜりふして姿をくらますか，週替わりで新たなモンスターが登場するかどちらかなので，何かに似ている，と思ってしまう。それはまだいいとしても，こんなご時世，少し変わった趣向をと手を伸ばした **Nicholson Baker** ── シュールな設定と軽妙なユーモアで知られる ── の新刊までその何かを思わせるとなると，いよいよ憂鬱になってしまう。

Baker の新刊 *A Box of Matches*（2003）の主人公，Emmet は 44 歳，二児の父。東部 Vermont 州の田舎町に住み，医学テキストの編集者をしている。男は毎朝四時台に起床し，暗がりで暖炉にマッチをくべて瞑想することを日課にしている。

未明から薄明にかけて男が展開する瞑想，自省，回想が，この薄い中篇小説の内容のほぼすべてである（「瞑想」といってもこの男の場合，ちっとも「超越的」といった類のものではなく，ある章など半分が「夜半のトイレで昼間のように立って小便することにいかなる危険性があるか」に割かれている始末であるが）。ともあれ，不眠に悩んだあげく逆療法として始めたというこの早起きは，「冷え切った部屋を暖める」喜びを主人公に実感させたり，「自身は燃え尽きて灰になりながら，周囲に暖かさと命を与える」薪のイメージがみずからの家長としての姿と重なり合ったりして，主人公を大いに高揚させるのである。だが当然ながらその居間に，「暖められ」ているはずの家族は，誰も起きてはいないのだ。

飼っているアヒルが寒そうに見えれば玄関に招じ入れ，小屋には毛布をかけてやる，そんなひどく親切な主人公の実存をただいま不安にしているのは，13 歳と 8 歳の子供たちにもうじき手がか

からなくなることだ。「そんなの耐えられない」と男は思う。不眠に悩まされていた頃，自分が殺される夢を見ることでようやく眠りについていた男にとって，「現実」とはいつもグロテスクで，恐ろしく，直視に耐えないものなのだ。── もし直視してみれば，アヒルは外で放っておいたって凍えたりはしないことがわかるはずなのだが。

毎朝，暗闇を「アイマスクのように着けて」過ごすうち，ある事件が起きる。インフルエンザに罹り輾転反側しているここ数日も断固として早起きの日課を欠かさない夫のためにと，妻があらかじめコーヒー粉をセットしておいてくれた紙フィルターを，男は知らずゴミ箱に捨ててしまい，妻に咎められるのだ。

男は激しく動揺する ── 寝ているはずの妻に見られていたことに？　他者からの親切を受け損ねたことに？　それとも，自分が親切を受ける側に回った居心地悪さに？　その後の主人公の行動は失敗，お節介，徒労の連続。翌朝起きてすぐ着火できるようにと暖炉に紙束を突っ込んでおけば，夜のうちに余熱で発火して灰になってしまう。

結び近く，シャワーの下で男は「裸で無防備」な自分を実感し，最後に一本だけ残ったマッチとマッチ箱を暖炉の火の中に投げ入れて，「もう自分は終わりだ」と思う。不思議はあるまい ── 主人公の名 Emmet とは要するに emit の謂いであってみれば，光と熱を放射する（emit）役目を果たせぬ自分は，もう自分ではないのだろう。

だが 13 歳の娘が言うように「暖かさを感じるには，まず冷えないといけない」なら，それも熱すぎる Emmet ── その言わんとするところはけだし，熱すぎるアメリカ ── にとっては，必ずしも悪いことではあるまい。男は定刻まで寝直すことにし，寝床に戻って，冷えきった体を他人，つまり妻の体温で暖めてもらうことにする。

巧みな作品である。まるっきり日常生活の細々した描写しか積み重ねていないようでいながら，ふと気づいた読者にはアメリカと国際社会とをめぐる暗喩が見えてくるというしかけ。「miniature の魔術師」の呼び名に恥じない出来だ。そして結末，行為の中断によって作品の狙いを伝えるあたりにも，「interruption こそが小説の権能だ」（www.salon.com のインタビュー）という Baker 独自の小説観がうかがえる。

だが，そうやって「アメリカ」に「待った」をかけるにしては，全体の筆致がセンチメンタルに，ナイーヴにすぎはしないだろうか。それに，せっかく emit という言葉をめぐって展開するなら，温室効果ガスの emission にも目を向けてほしい（京都議定書の無視はやめてほしい）ものである。まあ，これは作者に言うよりも連邦政府に向かって言うべき事柄だろうが。

（2003 年 4 月）

愉快な偶然

Partisan Review 誌がアメリカ共産党「人民戦線」の機関誌として始まって以来 68 年におよぶ歴史にピリオドを打つと報じられた，4 月 16 日の午後。MSN のニュースサイト slate.msn.com に，「*Partisan Review* 誌廃刊のアイロニー」と題する記事が載っていた。筆者はマッカーシーイズムと転向の問題を扱った著書で知られる Sam Tannenhaus。

遅れて来たトロツキストの一味（筆者註：ブッシュ大統領のブレーンである「ネオ・コン」の人々を指す）がホワイトハウスに自陣を確保したとたん，「母艦」の *Partisan Review* 誌が店じまいだなんて，笑っちまう偶然だなと筆者は言う。「永久革命」を奉じる「前衛」たちはいまや「有志同

盟」[9] と名を変えて，アフガニスタンの次はイラク，イラクの次はシリアを標的にしているようだな，とも。

なるほど，「ネオ・コン」にマルクス主義の裏返しを見るのには一理あるように思われる（事実，大御所 Irving Kristol も，国防副長官 Paul Wolfowitz も「転向」組だし）。自己の判断力にすっかり自信をなくしてノンポリになるのでなければ，二元論的発想を保ったままで超頑迷な保守主義者になるのは，転向者の常道でもある。

しかし，ユダヤ系の「ニューヨーク知識人」[10] ── 在野の左翼だろうが転向右翼だろうが ── に一貫する動機は「oppositionism（何でも反対）だ」と筆者が言い切っているのは，果たしていかがなものだろうか。たとえばくだんの *Partisan Review* 誌に集った人々は，たしかに「反帝」かつ「反ソ」，そして「アンチ大衆」を標榜して，一見すると「何でも反対」のように見える。しかしそれはあの時代，彼らが現実に見てきたものがそうさせたのであって，彼らにはスターリニズム＝ポピュリズム＝（同胞の命を奪った）ホロコーストの三幅対（トリアーデ）が互いに連関するものだ，ゆえに三者すべてに反対しなければならない，という彼らなりの確信があったはずなのだ。筆者 Sam Tannenhaus のようなカウンターカルチャー以降の，よく言えば素朴な，悪く言えば免疫不全の世代にはどう受け取られようとも。

現代の代表的「ニューヨーク知識人」の一人で，*Partisan Review* 誌最後の花形だった **Susan Sontag** が 2 月に上梓した戦争写真論 *Regarding the Pain of Others*（2003）が，日米でロングセラーを続けている。大江健三郎との数次にわたる対談をはじめ，Sontag の著書・発言は昨年あたりから日本でも矢継ぎ早に翻訳され，再びちょっとした Sontag ブームが起きているかにも見える。この新作評論も東京の主な洋書取扱店では，入荷たちまち売り切れの状態が続いているという。

本書は 1977 年の名著 *On Photography*（『写真論』）での議論を，9. 11 後のコンテクストにおいて再検証しようという趣向である。旧著を現実へと再び投げ入れるタイミングの鮮やかさが際立っているが，顧みれば Sontag はかつて 1987 年にも，78 年の旧著 *Illness As Metaphor*（『隠喩としての病』）を *AIDS and Its Metaphors*（『エイズとその隠喩』）として HIV 後の新たな現実に向かい合わせ，問い直している。いま思えば，これもユダヤ系「ニューヨーク知識人」としての伝統に根ざしたふるまい ── つまり，全人類の救済を念じ，その目的のために，芸術と現実社会との関係に拘ること ── であったとも考えられる。

本書で Sontag は「報道の罠」を指摘したり ── 第三世界の窮状を報道することが，かえって「そういうところだ」というイメージを固定化してしまう ── また「シンパシーの陥穽」を突いたり ── 写真を見る者は innocent な犠牲者たちに sympathize（感情移入）し同一化しがちだが，実際は彼らを陥れた責任の一端はわれわれにこそある。それに，われわれは彼らと違って無力ではなく，救うために行動する力を備えているはずだ ── と，あいかわらずの筆の冴えを見せている。

「グローバル化」が他者に対する根本的な無関心を要求しているとするなら ── というのも，国のあいだの垣根を利用して儲けている以上，どこもかしこも高賃金高消費型社会になって垣根がなくなったら，ちっとも儲からなくなってグローバル経済は成立しないのだから ── この本のさまざまな指摘は，そのような「無関心に支えられたグローバル化」に対して，有効な抵抗となりえていると言えるだろう。

しかしながら，本書の全編を読み終えたとき読者の印象にもっとも残るのは，かつての Sontag らしい才気煥発や批評のキレよりも，いささかの憂鬱を含みつつも奇妙に落ち着いた論調のほうなのである。たとえば「一度だけ見る写真は現実をよりリアルにするが，何度も見ると無感覚にさせ

る」という *On Photography* での有名な主張と，今回の主張を比べてみるとよい。彼女は言う，写真に何ほどかの効用があろうとも，あるいは現代フランスの思想家たちが「spectacle の支配」を言い立てようとも，そんなこととは関係なく現実というものは厳に存在しているのだと。著者はさらにこう述べる。われわれは現に存在している現実をこそ見るべきだ。部屋で独り，写真集を開いて，しかるのちに閉じて，人間普遍の「悪」へと思いをいたすことだ。どのみち，写真を通しては「理解」することなどできないのだから，と。

「左翼の危機」であった1970年代。二十世紀のアメリカ批評を牽引してきたユダヤ系「ニューヨーク知識人」たちの評判も，また危機の中にあった。硬直化した「反大衆」高踏路線も，不人気の一因であった。そんな中で登場した若き Sontag は，写真をはじめ大衆的なメディア，ジャンルを積極的にとりあげて，グループの延命に一役買ったのだった。

しかし，「写真よりも現実，本質」という，Sontag の今回の結論はどうだろう？　70年代の当時よりも，はるかに「ニューヨーク知識人」本来の伝統に立ち帰っているといえるのではないだろうか。そしてその背景にはひょっとすると，「ネオ・コン」に見られるように，ユダヤ系がいまやアメリカで本流となりつつあるという「余裕」があるのではないだろうか？

…なんだか，結局は Sam Tannenhaus 氏の意見を肯定するほかないようだ。

（2003年6月）

悲しき熱帯

「今頃○○が見ていたら…」と心に思う人がいる。○○に入るのは恩師，畏友，それとも？

筆者のばあい，アメリカの SF・ファンタジー作家 **Ursula K. Le Guin** だ。

かつて「ベルリンの壁」崩壊の直後，Le Guin は “Unlocking the Air”（1990）[11] という短篇を著して，東側諸国の「解放」について彼女なりの見解を示したことがある。中欧の架空の国を扱った連作短篇 *Orsinian Tales*（『オルシニア国物語』1976）の後日譚にあたるこの作品で作家は，「扉を開く」ことがやがては「西側」への新たな従属につながることを見据えた上で，しかし人間はいずれ「構造」に従属する生物なのである以上，「扉を開く」ことを決めたその瞬間の人々の選択にこそ，人間の「自由」があり「生」があったのだと記していた。

デモに集まった民衆がてんでにポケットから鍵を取り出して，あたかも「空気の鍵を開ける」ように空中に高く掲げ銀色の音を鳴らすという結びの場面は，ことに忘れがたいものであった。

十数年後，この不穏な世を，作家はどう見ているだろうか？

Le Guin が1998年から書き継いできた連作 SF 短篇が，7月に *Changing Planes*（2003）としてまとめられた。

plane（飛行機）の乗り継ぎ場たる空港は plane（「異次元」とでも訳そうか）旅行の入口でもある，と始まる周遊は，「現代のガリバー旅行記」といった趣である。

さて，そこでのアメリカ人たちの行状たるや実に勝手であり，何の関わりもない南洋の島々を占領し，文字通りの「ホリデー・リゾート」に変えてしまう ── 名付けて「年中クリスマス」島やら，「年中4日」（7月の ── つまりアメリカ独立記念日）島といった具合。章の最後に，島々は独立を回復するのだが，「国が違うとクリスマスらしくないわ」と米国人の女性客がクレームをつける。なんと戯画的にして，悲劇的なことではないか。いったい，キリスト教は「世界宗教」を標榜して

いたのではなかったろうか？

グローバル化した「普遍性」は，もはや普遍を名乗ることすらやめてしまい，最高度にローカルな（＝アメリカ的な）価値の押しつけにしかなっていないという事実。実に痛烈な諷刺だ。

われわれ日本人も安閑としてはいられない。小屋が密集し，実践応用のみに優れ principle（原理）を持たず，経済不況に苦しむその plane の「珍奇な住民たち」は，遺伝子組換え動植物の子孫なのだという。さらに別の plane にも，日本人を思わせる種族が散見される。曰く，もの言わぬ種族 。片言隻語がアメリカ人旅行客には過大評価されている ── 禅の公案のごとく ── が，実は大して中身はないのである。あるいは，人格が場に従属するため，年を取るにつれて人格が複数化する種族（ゆえに彼らの中では，老人の発言権・選挙権は若者の何人分もあるのだ）…。

そんな中で作家が真に共感を寄せるのは，クチバシを持つ Ansar 族の人々だ。地球上におきかえると実に二十四年分もある一年を，夏場は北の大地でつがいとして，冬は南の都市で無性的集団生活をして過ごす。近代文明を奉じる plane の種族からは「不合理」と軽蔑されても，彼ら Ansar 族の「選択」は種の固有性，つまり徒歩での migration（渡り）を継続することだった。

老 Ansar ── 老いた者たちは北に残り，死を待つという ── の語る，崇高な悲しみを湛えた言葉が，先住インディアンの族長そっくりに聞こえるのは偶然ではない。高名な文化人類学者で米大陸先住民の研究者だった両親から，作家が受け継ぎ，時間をかけてはぐくんできたテーマだ（1987 年の大作 *Always Coming Home* 『オールウェイズ・カミングホーム』に，そのひとつの結実がある）。

アメリカ人がしばしば標榜する「普遍性」に疑いの眼を向け，むしろ未開の「文化」に羨望する Le Guin の「人類学」の拠って立つところは，けだし半世紀前に文化人類学者 Lévi-Strauss が記した言葉まで遡るのだろう。

> 「アジアを見ると怖くなるのは，われわれの将来の姿がそこに現前しているからだ。比べると，インディオのアメリカには，人類という種が世界と調和を保っていたころの名残があって懐かしいのだが，今やそれも消えゆくのみである」（『悲しき熱帯』第 16 章末）

短いけれども，この作家の人間観の核心に触れられる構成と内容を備えた短篇集と思う。

（2003 年 8 月）

知識人と郷愁

San Francisco に the Bohemian Club という文芸サロンがある（あるいは，あった）。1872 年に Frank Norris, Samuel Clemens, Brett Harte, Ambrose Bierce, Jack London, John Muir ら地元 California ゆかりの綺羅星のごとき作家たちの自由な集まりとして始まりながら，やがてパトロンにと引き入れた全米の企業トップ達の「経団連」と化し，現在は財界と共和党大物との「料亭政治」の舞台になっている。

かつて特別に冒険心に富んだ者のみが目指した「黄金の土地」California ── その夢と遺産がかくも失われ，中央依存・連邦政府依存の体質へ変化してしまったのはなぜなのだろうか？[12]

何も変わっていない，元からこうだったのだ，と言うのは自身も開拓者の娘として生まれた批評

家・作家 **Joan Didion** だ。開拓者とは要するに現代で言う「ベンチャー」のようなもので，Hispanic よりもアジア系移民よりも前，中西部から Dust Bowl（砂塵災害）難民が移って来るよりも前から，自分で切り開いた土地を「一番高い値で入札した者」へと売り渡してきた。

だがその結果，「入札」し土地を買い取った中央の企業に，いま California 州の利益の大半は吸い上げられている状態である。数少ない地場産業であった軍事航空産業が工場を南部に移転させ，撤退していってからは，失業も貧困ももはや止めようがない。これも自業自得というものではないだろうか。

畢竟，わが先祖たちは故郷の親を捨て，道中の行き倒れを見捨てて，この地に着いたのではなかったか？　州内に異常に多い刑務所の数も，定住を始めてからもなお「お荷物」となる隣人や家族を精神病院に「遺棄」してきた伝統を継ぐものだ ──。

1960年代にデビューした New Journalism の書き手の中でも「私」へのこだわりにおいて突出する Didion は，著作で故郷 California を繰り返し取り上げてきた。新刊 *Where I Was From*（2003）では満を持してその「歴史」と向き合い，“moral ambiguity”（道徳的あいまいさ，いかがわしさ）を厳しく追及している。地元知識人たちの回想録，Norris や Faulkner や自身の小説，先祖の日誌を繙く作家はやがて，自分の母が一族の墓地を他人に売り払っていた事実を知る。売ろうと売るまいと「何の違いがあるの」と答える母に，激しく反撥する娘。

だが，母の死に際して作家は，母から教わったのがひたすら「生き抜く」ための術であったことに思い至る。

彼らは brave な人々だった。

彼らを捨ててきたのは自分だ。

作家は，自分の娘が歩く後ろ姿を見送りながら，real（実在）なのは自分が世に残すこの娘だけだと思い，これまでつけてきた難癖も，自身の批評も創作活動も，すべては「遠いこと」のように感じる。

「感動的」なラストだが，あれあれ，という気もするのである。

最近の時局絡みの発言[13] では「単純さ」に抗すべき知識人の使命を強く自覚するふうな Didion だが，それが自分自身の「曖昧さ」の発見で止まるようなら，それこそ「何の違いがあるの」だろうか。「自分も同罪」とは議論の終着点ではなくて，出発点であるべきものではないのか？

彼女の「文学」が「感動的」なフィナーレを迎えようとも，現実は続いていく。その現実を見送るだけならば，もはやそれは批評家の仕事とは言えまい。

（2003年10月）

嘘も方便

2003年暮れのアメリカ文芸は賑わいを見せた。Nobel 賞作家 Toni Morrison 待望の新作 *Love*（2003）が出，同じ Nobel 賞でもこちらは平和賞の Jimmy Carter 元大統領は，歴史小説 *The Hornet's Nest*（同）で史上最高齢？　の小説家デビューを果たす。「無冠の帝王」Paul Auster の

新作 *Oracle Night*（同）も出た。だが登場人物の顔ぶれにかけては，**Tobias Wolff** 初の長篇となる *Old School*（同）がいっとう豪華だった。

舞台となるのは東部のある prep school。数々の文豪を特別講師として迎えてきたその高校が1960年に招くのは，校長の友人である桂冠詩人 Robert Frost，理事長お気に入りの人気作家 Ayn Rand，そして dean（学生部長）の「戦友」Hemingway!

食堂を埋めた生徒たちにナプキンを振って応え，Frost が演説する。

「現代生活の複雑さを形式によって描けるか，じゃと？　戦争の苦しみならギリシャ時代から変わっておらん。ただの涙を悲嘆に，詩に変えるのは形式じゃ。形式がすべてなのじゃ！」

文豪たちのふるう熱弁に引用は一切なく，純然たる Wolff の創作だそうだが，本人を彷彿させて見事なものだ。

創作コンクールの優勝者に与えられる，巨匠とのプライベート・レッスンという栄誉をめざし，不良文学少年の「私」は仲間としのぎを削り，韜晦し，出し抜き合う。

やがて「私」は夢にまで見た Hemingway との面談を勝ち取るが，その作品はなんと，隣町の女子校の文芸誌からの剽窃だった。発覚，放校，そして dean の辞職…。

ところが数年後「私」と初めて会った原作者の元女子高生は，意外にも「私」の行為を賞賛するのだ。あなたはマッチョな文豪に，わざと女の書いた作品を第一位に選ばせたんでしょう？　それってまさに「父権制の転覆」じゃない？

畢竟，「真実」とは相対的であり，それぞれの文脈に依存するのではあるまいか？　そして文豪たちにしても，生徒が書いたあまりにも古典的な創作を，勝手に「パロディ」と知的に誤読して誉めたりするのだ。

学園もまた嘘を抱えていた，と「私」は言う。大戦中イタリア戦線の看護兵として負傷した dean は，経歴こそ似れど Hemingway とは一面識もなかったのだ。しかし噂が伝説になり，その伝説のおかげで学校の株も上がるに及んで，今更否定のしようもなくなっていた。

一度は恥じて「私」と共に学校を辞した dean だが，やがて嘘を引き受ける覚悟を決め，復職する。「放蕩息子の帰還」の神話＝形式をわが身にだぶらせながら…。

「真理」が或る条件に対する最適解でしかなくなった「複雑な現代生活」では，嘘もまた最適解となりうるのかもしれない。フォーマット化された嘘＝虚構ならなおさら。そもそも dean の告白自体が，「その後ヴェトナム戦争に従軍し今は有名作家となった」「私」の巧みに拵えた excuse，「虚構」とも受け取れるのである。苦い話だと思う[14]。

（2003年12月）

〈注〉

（1）　ネブラスカに移住したスウェーデン系開拓者を描いた Willa Cather の小説 *O Pioneers!*（1913）より。

（2）　かつは「米国政府による日本政府への年次改革要望書」に則ってもいる。

（3）　邦訳，ルース・L・オゼキ『イヤー・オブ・ミート』佐竹史子訳，アーティストハウス，1999年。

（4）　豚皮スナック：豚の皮下の部分を揚げたスナック。本作の牧場労働者のような南部のワーキングクラスに人気がある。基本的に米国ローカルの菓子であるのにそれを「グローバル化」させてしまう点，し

かも皮しか使わないという反エコロジーのきわみに，プルー一流の批評精神が横溢している。

（5） 旱魃と耕作法の問題（耕しすぎと「雑草」の引き抜き）のため表土が風に飛ばされて猛烈な砂嵐と化し，土地は作付不能，住居は居住不能となり多くの人々が移住を余儀なくされた。塵肺による死者も多数出た。John Steinbeck の名作 *Grapes of Wrath*（1939），Woody Guthrie の歌ったフォークソング等にくわしい。

（6） いわゆる「バッファロー」。本来，バッファローはアフリカ，アジア原産の別種の動物。

（7） その後，本作を翻訳する過程で判明したことだが，作中で実名で紹介されている養豚会社のうちの一つ（Global Pork Rind 社は架空）は，実際に日本の大手食品会社の現地法人であった。米国の大手食品会社は遺伝子組み換え作物から「出口」の冷凍食品やファストフードにいたるまで，世界中に広範な支配力を及ぼしているわけだが，日本から米国へと，逆方向のグローバルな進出（交流？）もまた実際に行われているわけである。

（8） Ernest Hemingway の短篇小説 “I Guess Everything Reminds You of Something”（posth. 1987）より。

（9） coalition of the willing: G. W. Bush 大統領が募った，イラク民主化作戦に賛同する国々，約 40 カ国の連合。

（10）「ニューヨーク知識人」の研究書として優れたものに，堀邦維『ニューヨーク知識人』彩流社，2000 年。前川玲子『アメリカ知識人とラディカル・ビジョンの崩壊』京都大学学術出版会，2003 年がある。同じく論文としては，秋元秀紀「冷戦初期のニューヨーク知識人」前川玲子「ニューヨーク知識人たちの軌跡」（いずれも山下昇・編『冷戦とアメリカ文学』世界思想社，2001 年所収）がある。

（11） 同名の短篇集に収められている。この短篇集は彼女が長期間にわたりさまざまな場所で発表した mainstream（純文学）作品を集め，同年，短篇集としてはめずらしく Pulitzer 賞候補となった名著である。

（12） この稿は電力危機，山火事，州知事リコール，Schwarzenegger 新知事の選出へと続く一連の混乱の中で書かれている。

（13） *New York Review of Books* 掲載記事を単行本化した *Fixed Ideas: America Since 9. 11*（2003）など。

（14） この稿は，イラクにおける「大量破壊兵器」の存在が「虚構」であったという騒動の中で書かれた。

Annie Proulx の *That Old Ace in the Hole* はその後，筆者の邦訳が刊行された。アニー・プルー『オールド・エース』米塚真治訳，集英社，2004 年。「訳者あとがき」として比較的くわしい作者紹介・作品解題を付したので，ご参照いただければ幸いである。

Proulx のその後の作品としては，1999 年の短篇集 *Close Range: Wyoming Stories* の続篇にあたる *Bad Dirt: Wyoming Stories 2* が 2004 年に刊行された。また *Close Range* の掉尾を飾っていた中篇 *Brokeback Mountain*（『ブロークバック・マウンテン』米塚真治訳，集英社文庫）は 2005 年に Larry McMurtry と Diana Ossana の脚本，Ang Lee（李安）監督により映画化された。ヴェネチア国際映画祭の金獅子賞（グランプリ）をはじめ，LA 批評家協会賞，NY 批評家協会賞などを続々と受賞し，同年度のアカデミー賞レースを大いに賑わせている。

文中に記した「構造改革特別区域法」にもとづく「特区」申請は，その後 2003 年 4 月から受け付けが始まった。さらに 2005 年 9 月からは日本全国で，企業による農業経営が可能になった。

ところで，参入してきた企業を分野別に見ると最も多いのは，意外にも建設会社であり，農地を借り受けない作業請負や施設内での栽培も含めればすでに 120 社以上にのぼるという。というのも地方の中小建設会社は元はといえば兼業農家であり，公共事業の減少に伴って再び「帰農」を考えざるをえなくなったからだという（『R 25』リクルート，2005 年 9 月 22 日号）。本文で述べた「余ってしまった労働人口は，再び農業人口として吸収しなければならないだろうという長期的な見通し」はすでに現実のものになっているわけだ。

筆者の **Nicholson Baker** 評については，渡辺克昭氏が「燐光を放つ trivia」（『英語青年』2004 年 8 月号「海外新潮」p. 297）において，「異なった視座を提示することも可能であろう」として，Hemingway や Thoreau, Hawthorne を参照しつつ精緻な読解を披露しておられる。

Baker の本領は日常瑣事への深い沈潜にあり，その「detail において空疎な Bush のアメリカを逆説的に凌駕する」のであって，筆者の評にあるようなあからさまな政治的寓意を散りばめたはずはない，というのが氏の読解の立脚点であろう。

限られた本数のマッチが照らし出す限りある生命の時間が本作のポイントなのか，それとも筆者が論じたように，燃焼の中断にこそ寓意を読み取るべきなのか，判断は読者諸兄姉に委ねたい。ひとつ付け加えるなら，この後 2004 年に彼が刊行した中篇 *Checkpoint* における「ブッシュ大統領暗殺を企む男との長電話」というあからさまに政治的な設定を見ると，日常と政治をめぐる Baker のスタンスが一筋縄でくくれるものでないことは明らかである。

Susan Sontag の *Regarding the Pain of Others* はこの評執筆の翌月，2003 年 7 月に『他者の苦痛へのまなざし』として邦訳された（北条文緒訳，みすず書房）。また同年度の全米批評家協会賞の批評部門で候補作となった。その後も日本では 2002 年のシンポジウムが『良心の境界』として邦訳されるなど「Sontag 再ブーム」というべき関心を集め続け，彼の地でも *New York Review of Books* 等に活発な寄稿を続けていたが，2004 年 12 月に白血病のため死去した。

作家のリービ英雄は彼女の死去の直後，朝日新聞に掲載した記事（「時流自論 ── スーザンが残した言葉」2005 年 1 月 23 日朝刊）の中で，9. 11 の直後に勇気を持って non-conformism を貫いたことをとりあげた。反論することこそが相手の話をちゃんと聞いている証になるような，そんなニューヨーカーらしい批評精神の代表が，「世界が批評を最も必要としている時代に」失われたことに，彼は深い懸念を表明していた（リービ英雄自身も 2005 年，9. 11 を扱った日本語による小説『千々にくだけて』を出版している）。

リービが指しているのは，2001 年 9 月 23 日号の *The New Yorker* 誌に「ぜひ一緒に喪に服しましょう，しかし一緒にバカになるのはやめましょう」と書いた Sontag が激しいバッシングを受けた一件である。一定の時間をおいて眺めたとき，批評家としての晩年の Sontag の仕事は，どう見えてくるであろうか。

Ursula K. Le Guin の *Changing Planes* は 2005 年に『なつかしく謎めいて』として邦訳された（谷垣暁美訳，河出書房新社）。Le Guin は 2004 年にはファンタジー *Gifts* を刊行，今後も詩や翻訳を含め，いくつもの出版予定がアナウンスされている。

Joan Didion はこの後 2003 年 12 月に夫の作家・脚本家 John Gregory Dunne を失くした。2005 年 10 月の *The Year of Magical Thinking* はそれ以来の新著となり，多くの共同創作を生み出した亡夫との生活を綴って大きな反響を呼んだ。2005 年度の全米図書賞ノンフィクション部門の受賞作となった。

この評が書かれたのは 2003 年 8 月に California の前知事 Gray Davis がリコールされ，俳優 Arnold Schwarzenegger が州知事に選出されるという一連の動きのなかでであった。文中に記した「中央との蜜月」をアピールすることで期待を集め，就任を果たした同知事であったが，ヒトゲノムの研究を巡っては，キリスト教右派の支持を受ける G. W. Bush 率いる連邦政府と一線を画し，推進姿勢を打ち出した。そして彼の支持率は徐々に低下し，2005 年 11 月には州予算案の信任を問

う住民投票に打って出たがこれにも敗れ，いまや California 住民と州政府との関係は「イタリア化」しつつあるような印象すら受ける。

Tobias Wolff の *Old School* は 2003 年度全米批評家協会賞の小説部門で候補作となった。